

三星雄大の生活科（第1学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

生活科は、具体的な活動や体験を通して、自立への基礎を養うことを目標としている。これは、実社会や実生活と直接かかわる学習活動でこそ実現できる。そこで私は、児童の生活圏としての環境に関する内容において、**身近な人に親しみをもちながら、気付きの質を高める子ども**を目指す。子どもにとって、最も身近な学校、家庭、地域という実社会や実生活を扱う内容である。この内容を学習することによって子どもは、自分が身近な人に支えられていることに気付く。さらに、支えられている人に感謝し、自分にできることをしようと思いや願いをもつ。例えば、内容（1）「学校と生活」において、「〇〇さん、いつも暑い中草取りをありがとうございます。私は〇〇さんのことを応援しています。〇〇さんこれからも頑張ってくださいね。私も自分ができることを頑張ります」などと、手紙に記述する姿である。これは、自立への基礎の中でも、生活上の自立につながる姿であり、生活科で求められている。

従来も、身近な人とのかかわりは大切にされ、気付きの質を高める指導はなされてきた。しかし、「〇〇をしていた」のように、身近な人の仕事内容などへの気付きに留まる子どもが多く見られた。子どもが目指す姿に至らなかった指導上の原因は二つある。

- ① 活動させる際に、身近な人のことを見させたり、インタビューをさせたりするだけだった。
 - ・ 今までの実践では体験させるときに、身近な人の事実を詳細にとらえさせることや身近な人の仕事の大変さや頑張りなどを実感を伴って気付かせることが不十分であった。
- ② 子どもが気付くまで活動と表現を繰り返し行い、教師の見取りや価値付けによって気付きの質を高めさせるだけだった。
 - ・ 子どもの学習対象へのかかわり方によって気付きに差が生まれていた。例えば、繰り返しかかわる中で、身近な人の頑張りなどに気付く子どももいれば、身近な人の仕事内容などへの気付きに留まる子どももいた。低学年の子どもが、身近な人とのかかわりを通して、自分にできることをしたいという思いや願いをもつことは難しい。教師が意図的にかかわらせたり、頑張りなどに気付かせたりする場や状況設定が必要である。

そこで私は、次のように改善を行う。

- ① 仕事内容や表情や人柄を詳細にとらえさせ、身近な人のすごさなどを実感を伴って気付かせるために、身近な人と一緒に仕事をする活動を複数回設定する。
- ② 身近な人と一緒になって仕事をさせた後、自分と身近な人とを比較して違いに気付くことができるように気付きを整理しながら交流させる。

(1) 「中核的な知識や技能」

身近な人に対する気付きの質の高まり（自分が身近な人に支えられていることに気付き、感謝の気持ちを持ち、自分にできることを考えること）

(2) 「学びをつなぐ力」

比較するすべを用いて、自分と身近な人とを比べて違いに気付く力

2 主張する働き掛け

子どもは、身近な人に支えられていること、感謝の気持ちをもつこと、自分にできることをしようと思いや願いをもつまでに至っていない（C0）。

単元の導入では、身近な人の仕事の中で自分がどのようなことを一緒にしたことがあるかを問う。子どもは、これまでの経験から「〇〇さんと～したことがある」などと、発言する。その後、自分がしたことがなくても身近な人がしている仕事について知っていることはないかを考えさせたり、身近な人がしている仕事を調査させたりする。

働き掛け1

どのようなことを考えながら仕事をしているかを考えさせ、誰とどのような仕事をしたのかをワークシートに記述させる。

身近な人と一緒に仕事をしたいという思いや願いをもたせるための働き掛けである。まず、事前に調べてきた**身近な人**（「対象」※以下：身近な人）がしている仕事を発表させる。人や仕事内容ごとに分類して黒板にまとめる。次に、どのようなことを考えながら仕事をしているのかを問う。子どもは、「…ために仕事してくれている」などと、発表する。その後、誰とどのような仕事をしたいのかを問い、ワークシートに記述させる。子どもは、「今度はぼくも一緒にしたい」などと、身近な人と一緒に仕事をしたいという思いや願いをもつ。これが問いをもった姿である。

働き掛け2

身近な人と一緒に仕事をする活動（以下：『まねっこ活動』）を複数回設定する。

仕事内容や表情や人柄などを詳細にとらえさせ、自分と身近な人とを比較しやすくするための

働き掛けである。身近な人と一緒に仕事をさせる。すると子どもは、見ているだけでは気付かない仕事の難しさや大変さに気付いたり、日々自分のために働いてくれていることに実感を伴って気づき、心が惹かれたりしていく。

活動後、『まねっこ活動』をして「したこと・思ったこと・分かったこと・聞いたこと」を先生に紹介してほしいと伝える。そして、『☆☆日記』の形式で気づきを蓄積させる。子どもは、「○○さんと一緒に～をした。こんなに難しいことをしていたのかと思った」などと記述する。このとき、比較するすべを用いて、自分と身近な人とを比べて違いに気付く子どももいる。

働き掛け3

『まねっこ活動』を振り返る活動を複数回設定する。

「学びをつなぐ力」を発揮させるための働き掛けである。「『まねっこ活動』をして、したこと・分かったこと・思ったこと・聞いたことを友達と紹介しましょう」と投げ掛ける。子どもは、『☆☆日記』に記述した内容を発表する。このとき、聞いている子どもには、質問するポイントを教え、友達を賞賛する言葉を投げ掛けるように指示する。

その後、『まねっこ活動』のことを先生に教えてください」と投げ掛け、全体で発表させる。発表した内容を自分と身近な人とを対比して板書していく。子どもは、「ぼくは～だけど、○○さんは…だ」などと、発表する。これは、比較するすべを用いて、自分と身近な人とを比べ、違いに気付いている姿である。

なお、働き掛け2と3はセットにして複数回行う。

働き掛け4

身近な人をどのように思っているかを問う。

「中核的な知識や技能」を獲得させるための働き掛けである。子どもは、『まねっこ活動』を通して、身近な人の「大変さ」「頑張り」などを実感している。しかし、多くの子どもは無自覚である。気付いたことを発表させる中で、自分と身近な人の違いに気付いた段階で、身近な人をどのように思っているかを問う。子どもは、身近な人の仕事を見てきた経験や『まねっこ活動』でのかわりから、自分が身近な人に支えられていることに気づき、感謝の気持ちを持ち、自分にできることを考える。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け

- ・働き掛け2において、「☆☆日記」の記述から、「学びをつなぐ力」を発揮している部分に線を引き、価値付ける。
- ・働き掛け3において、違いに気付いた子どもに、どうしてそのように思ったのかを問う。
- ・発言した友達と同じ気持ちの人がいたら挙手をさせ、比べて考えたよさを価値付ける。
- ・手紙の記述から、「学びをつなぐ力」を発揮している部分に線を引き、価値付ける。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けである。

働き掛け2において、「☆☆日記」の記述から、「学びをつなぐ力」を発揮している部分に線を引き、「比べて考えたのですね」などとコメントを添えて価値付ける。

働き掛け3において、「どうしてそのように思ったのか」を問う。子どもは、「一緒に仕事をしてみて気付いた」などと、自分と身近な人の違いに気付いた理由を述べる。このとき、発言した友達と同じ気持ちの人がいたら挙手をさせる。そして、比べて考えたよさを価値付ける。

また、単元終末に、身近な人から手紙を渡し、読ませる。その後、身近な人への手紙を書かせる。この手紙の記述の中で、自分と身近な人とを比べて考えている記述に線を引き、価値付ける。子どもは、身近な人に対する気づきの質の高まりや手紙の言葉などから、**身近な人に親しみを持ちながら、気づきの質を高める子ども**（Cn）となる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4や「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けにおいて、身近な人に対する気づきの質を高めているかを発言や手紙の記述から検証する。
- ② 働き掛け2や3において、比較するすべを用いて、自分と身近な人とを比べて違いに気付いているかをワークシートの記述や発言から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚させるための働き掛けにより、比較して考えたことの有用性を自覚しているかを発言、挙手、手紙の記述から検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（6月） 「がっこうたんけんたいーすてきな○○さんー」（20時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「ぼくのわたしのすてきなかぞく～かぞくニコニコだいさくせん～」（6時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「ようこそふぞくしょうがっこうへ～園児さんとおともだち～」（14時間）